

# 江戸期の解剖資料展示

津山 模型や図面25点



内部に臓器の模型が収められた「生き人形」に見入る来場者

えるため現在、書籍や論文に用いられている「メイカイルラストレーション」も並ぶ。川崎医療福祉大2年濱田萌さんは「人体の中身が分からない中で、解剖に取り組むのはかなり衝撃的だったと思う。その歴史が現代の医学につながっていることを実感した」と話した。

日本の医学発展に大きな影響を与えた江戸時代の人体解剖図などを集めた企画展が、津山洋学資料館（津山市西新町）で開かれている。国内初の解剖記録「蔵志」の原図や人形が飾られ、関心を呼んでいる。10月4日まで。

を膨らませたり、のこぎりで頭部を切ったりする医師らの様子を確認できる。内部に臓器の模型を収められる「生き人形」もあり、注目を集めている。手術方法や研究成果を伝

午前9時～午後5時。入館料は一般300円、高校・大学生200円、中学生以下無料。問い合わせは津山洋学資料館（0868-33324）。

（田井香菜子）

国立科学博物館（東京）など所蔵の25点を展示。蔵志の原図3枚は、医師山脇東洋（1705～62年）が54年に行った解剖を基に、肺や腸といった臓器を正しい配置で描写している。当時、国内で主流だった漢方医学の考え方を映した「五臓六腑図」を否定する実証的な図として知られる。

江戸中期以降に描かれたとみられる「刑死者解体図」は、気管に筒で息を吹き込んで肺